A・フェレル著

『アルゼンチンの経済
――その発展の諸段階と現在の諸問題』

Aldo Ferrer, *La Economía Argentina, Las Etapas de su Desarrollo y Problemas Actuales*, Fondo de Cultura Económica, México-Buenos Aires, 1963, 266 p.

I

アルゼンチンは先進国か後進国か？「社会経済構造は比較的多様化され，農業生産は完全に市場経済に統合されている。しかも，農業生産性の水準は，全産業の生産性と等しい。そして農業は国内労働力の4分の1を吸収しているにすぎないのである。……他方，文化の水準も社会構造の型も近代社会のそれと異ならない。……アルゼンチンのこのような顕著な諸条件から，W・W・ロストウのように，アルゼンチンを自立的発展の可能性を有する国の一つとして位置づける学者がいる。ロストウは，アルゼンチンを自立的成長に向かって“離陸”を実現した国々のなかにいれているのである。ところが，実際にはアルゼンチンは，ここ15年間停滞を続けている，ラテン・アメリカ唯一の国なのである」(注1)。

それでは，なぜ先進国的な経済社会構造を持ちながらも長期の停滞を続けているのであろうか。この問題を理解するにはロストウ流の認識だけでは不十分なことは言うまでもない。

これに対して著者は「現在の状況を規定する歴史的根源と世界経済において生じた変化を分析することなしには，この停滞の原因の十分な理解を得ることは不可能である」(p. 9. 傍点は引用者）と主張するのである。このことから本書の意図は明らかであろう。

このような分析を行なうために，著者はまずアルゼンチンの経済発展の諸段階を設定する。諸段階を設定することによって，(1)近代的な分析方法を適用しうるように資料を利用して，発展過程を叙述することができ，(2)その発展過程の展望の下に，現代を位置づけることによって，短期的分析では不可能な現状分析を行なうことができ，しかも，(3)発展過程における社会諸勢力の構造――それは，これまで経済学者がふれなかった問題であるが経済発展を正確に知るためには不可欠である――を明らかにすることを可能にするのである。

この方法は著者自身も述べるように，ブラジルの著名な経済学者，Celso Furtado のブラジル経済の研究に影響されるところがきわめて大きい(注2)（当然のことではあるが，発展の諸段階といっても，ロストウ流のそれとは性格を異にしていることはいうまでもないだろう。ここでいう発展の諸段階は，約言すれば，世界経済の変化とその中における地位に規定された，具体的なアルゼンチン経済の発展段階なのである)。

このような諸段階は，著者によってつぎの四つの段階に区分されている。この区分が本書の構成そのものでもある。

I　地方的自給経済（16～18世紀）
II　過渡的段階（18世紀末から1860年まで）
III　1次産品輸出経済（1860～1930年）
IV　未統合の産業の経済（1930年以降）

本書はこれらの諸段階の各々について分析をすすめ，その分析に基づいて最後に，

V　統合的な産業の経済のための諸条件

として，今日のアルゼンチン経済が，IVで分析されたような長期的停滞からどのように抜け出すべきかを論じている。

著者は，アルゼンチンの経済学者であるが，研究活動だけにとどまらず，1958年以後のフロンディシ政権下においては，ブエノスアイレス州の，道路建設，エネルギー部門など社会資本の整備，土地所有制度の修正，公共サービスの拡大など，地域経済発展を助成する政府の計画に参画している。

（注1）特殊な例であるハイチ，ボリビアおよびパラグァイを除く。引用は本書 p. 240。アルゼンチン経済の停滞は最近特に著しい。最近10年間の国民1人当たり所得の成長は，わずかに年率0.06%にすぎなかった（詳細は，「最近10年間のアルゼンチン経済」，本誌第5巻第5号所収)。なお，それにもかかわらず，1人当たり国民所得の水準は，ラテン・アメリカ全体の平均の約2倍である。

（注2）特に *Formação econômica do Brasil*, Rio de Janeiro, Editôra Fundo de Cultura, 1959. 本書は1962年にスペイン語訳がメキシコで出版され，また昨年英訳が出版された。*The Economic Growth of Brazil――A Survey from Colonial to Modern*, University of California Press, 1963.

II

以下，これらの各段階について著者の分析を紹介しよ

う。

第1に地方的自給経済の段階(etapa de las economías regionales de subsistencia)は，各地方に，各種の経済社会複合体が存在し，それらが基本的には域内消費のために――しかも，非常に低い生産性のもとで――生産を行なっていた時期である。

この時期の経済の特徴としては，したがって輸出向け生産がきわめて低く，域内消費向け生産が中心であり，人口は停滞し，所得は地主に集中し，ほとんど資本蓄積が行なわれえなかったことがあげられる。アルゼンチンが長い間，このような自給経済の状態にとどまっていたのは，中南米の他の植民地と異なり，この時期においては，輸出向け生産を行ないうる要素が存在しなかったからである。

このような経済構造は18世紀末に至って，はじめて重大な変化を受けることとなる。その重大な変化とは，(1)ブエノスアイレスが植民地貿易の重要中継地となったこと，および，(2)リトラル地方（沿海地方，パンパにほぼ一致する）の牧畜業が，急速に輸出向け生産の性格を強めたことである。ブエノスアイレスは，これまで後背地に主要輸出産品の生産がなかったこと，植民地貿易の中心がカリブ海周辺にあったことから，植民地貿易の中継地となりえなかったが，1776年にラプラタ副王領が創設され，その後貿易の統制がゆるめられるという本国の政策の変化と，後背地の牧畜業産品の輸出拡大を契機に植民地貿易の中継港として急速に発展することとなり，商業の発達を促したのであった。

他方，牧畜業は，労働力をあまり必要とせず，技術的にも簡単な産業であるため，パンパという広大肥沃な土地の存在のもとで，世界需要の拡大と上記の商業貿易制度の自由化によって輸出向け生産として，この時期に急速に成長したものであった。皮革の輸出は18世紀中葉の15万個から，1850年の200万個へ増大したのである。

このような新たな条件は当然アルゼンチン経済に大きな変化をもたらし，第2の時期，「過渡的段階」(etapa de transición)への移行を意味した。この段階の最も重要な点は，はじめて，世界経済につながる輸出向け生産が開始されたことで，それはまずブエノスアイレスの商業中継地としての地位が確立したこととともに，経済発展のダイナミックな要因の導入を意味したのである。これによって，従来の停滞的自給経済から脱皮して経済発展を行なう道が開け，同時に，そのような要因が導入されなかったリトラル以外の地方との経済的格差がみられるようになったのである。

牧畜生産の発展は第2に，牧畜地の拡大と土地の私的所有の拡大をもたらした点が重要である。まず前者は粗放的な牧畜生産の生産量の拡大のために不可欠であったため，フロンティアをしだいに奥地へ移すことによって絶えず行なわれ，さらにRosas 政権時代にはインディオの討伐戦争によって，ほぼパンパの全体にまでフロンティアは押し広げられた。一方，牧畜業の近代化（遊牧的でなくなる）に伴い，土地の私的所有が進められ，戦争功労者への公有地の払い下げなどにより，この時期の終わりには，パンパの土地の大部分が，ごく少数の大土地所有者によって，私的に所有されることとなったのである。「過渡期」に成立したこのような土地所有の集中は，その後の経済，特に農業生産を強く規定することとなる。

ところでこのような変化にもかかわらず，「過渡期」には，まだ「国民経済」は成立しなかった。今なお，各地方経済の孤立的性格は残存し，資本・労働力・生産物の流動性は低かったからである。

ところが，1860年前後より，世界経済の新たな展開によって，このようなアルゼンチン経済は根本的変化を受けることとなる。それは「過渡期」から「1次産品輸出経済」の段階(etapa de la economía primaria exportadora)への移行を意味したのである。

この変化をもたらした世界経済の新たな展開とは，19世紀中葉の世界経済の拡大と統合で，より具体的には，(1)資本の国際移動，(2)移民，(3)世界貿易の拡大となって現われたものである。パンパという農・牧畜生産にきわめて適していたアルゼンチンは，このような世界経済の変化の過程において最も重要な影響を受けた国の一つであった。

これによって起こった最大の変化は，農・牧畜生産の急速な増加であった。それは，農・牧畜産品に対する世界需要の拡大と，海外からの移民，鉄道建設を主とする外国資本の流入によって可能となったものであった。しかし，これら輸出向け生産の急速な増大とそれに伴う経済全体の発展を強く条件づけたのは，過渡期の終わりまでにほぼ完了していた大土地所有制度であった。

すなわち，この時期に開始した農業生産のにない手たる移民は，確立された大土地所有制度のもとにあっては借地農または農業労働者とならざるをえなかったのである。このような大土地所有制度は，(1)移民の農業への吸収に限界を与え，(2)農業所得が大地主に集中したことから農業投資を遅らせることとなった。けれども，土地所

有の集中のために，都市に向かわざるをえなかった移民は，しだいに増大してきた国内需要に対する工業生産や商業に従事するようになり，1930年には工業には全就業人口の26%が従事するようになり，第3次産業は38%となったのに対し，農業・牧畜業は36%へと低下したのである。これは，肥沃なパンパにおける比較的近代的農業の高い生産性が，農業に労働力をあまり吸収せしめなかったこととともに，土地所有の集中による移民の都市集中が重要な原因となっている。

しかし，ともかくこの時期における総生産の増加は非常に急速に進み，人口も約3倍になり（1869～1914年），これまでにない経済発展を遂げたのである。そしてこれは，主として輸出向け1次産品の生産拡大に支えられていたという点に，この時期の特徴がある。

しかしこのような発展は長くは続かなかった。1930年の大恐慌を契機に世界経済は新たな変化を経験し，アルゼンチンに強い影響を与えることになるからである。それとともにアルゼンチンの経済も，「未統合の産業の経済」の段階 (etapa de la economía industrial no integrada) へ移行することとなる。

1930年以後の世界経済の変化は，要するに1次産品に対する世界需要の伸び悩み，国際資本移動の遅れと，国際資本の投資される分野の変化である。

このために起こった輸出と輸入能力の停滞に対して，国内の工業化，特に輸入代替工業が進み，工業部門の比重は高まった。しかし，この時期（1930年より現在に至るまで）の生産の拡大は，前の時期に比べて非常に不十分なものであった。総生産は，前の時期には年平均5%の増加（1人当たり1.2%）であったのが，年平均2.5%の増加（1人当たり0.6%）に低下したのである。

このような生産の伸び悩みは，戦後になっていっそう激しくなった。すなわち，先の生産増加の割合をより詳細に見ると，1945～49年（平均）を基準とすれば，それ以前の時期では総生産の増加は年率2.8%（1人当たり0.8%）であったのに，それ以後の時期では，総生産の増加はもはや人口の増加率(平均1.8%)に追いつかない，すなわち1人当たりの生産は減少に転じたのである。したがって，この「未統合の産業の経済」の段階は，明らかに二つの時期に分かれ，1950年以後の後半の段階において，「産業の未統合による経済発展の不均衡と停滞の各種の傾向が明らかになった」(注3)ということができる(p. 212)。

この後半の時期の停滞の原因は，第1に1次産品輸出の停滞，交易条件の悪化，外資流入の減少による輸入能力の停滞が，この時期に特に激しくなったうえに，これまでの時期にすでに消費財などの輸入代替が進んでいたため，消費財のいっそうの輸入代替による外貨節約はもはや行ないえず，輸入能力の減少はそのまま原料・資本財輸入の不足として現われざるをえず，工業生産活動の機械・設備への投資や，社会資本への投資が不足し，工業生産が停滞せざるをえなかったことがあげられる。

第2の原因は，農・牧畜業生産における構造的欠陥――特に土地所有制度と結びついた――，農・牧畜業産品に対する内外需要の停滞および社会資本の不足から生じた農・牧畜業部門の生産の停滞である。この部門における土地所有制度と結びついた構造的欠陥とは，機械化などによって生産性を向上して，低コストで農・牧畜産品を供給する必要があるにもかかわらず，農・牧畜業の利潤の多くが，大土地所有者に吸収されて，農・牧畜業部門の投資に向かわない事実で，これは特に，1950年以降政策の転換によって，農産物価格を生産者に有利にして，増産，輸出増加を意図したにもかかわらず，それが成功しなかった根本的原因となっている。

このように工業・農業のいずれもその発展の可能性が阻まれ，社会資本への投資が行なわれないために，資本・労働力は非生産的産業（政府機関，サービスなど）に過渡に集中する結果にならざるをえないのである。

要するに，上記のごとき「経済の未統合の性格を決定づけている基本的事実は，経済成長と雇用の水準が，基幹的産業の不十分な発展のゆえに輸入財の供給に依存せざるをえないことに根ざしている」(p. 12) と言うことができよう。

（注3）実際には1948年がこの時期の経済発展のピークで，それ以後停滞に転じたのであるが，停滞の問題がより明らかになり，それに対する政策が行なわれるようになったのは1948年から1950年にかけてであった。したがって，厳密には考慮すべき変化の始点は，1950年にとるべきであると著者は付言している(p. 212 脚注)。

III

以上が本書の概要である。先に引用した個所で著書自身が述べるように，世界経済の構造的変化と，その中におけるアルゼンチンの地位の変化に注目しながら，これまでの経済発展の過程をあとづけ，現在の停滞の問題に接近しようとする点に本書の特徴があり，これまでのアルゼンチン経済の研究のなかでもきわめてユニークな性

格を持つものと言えよう。

本書の分析において注目すべき第2の点は，アルゼンチン経済における大土地所有制度の問題がきわめて重視されていることである。ここに紹介した概要からもわかるとおり，本書においては大土地所有制の成立期より一貫して検討が加えられ，特に1950年以後の現在の停滞を論ずるに当たっては，それが農業の構造的欠陥を構成しているものであるとしているのである。それは著者のいう「現在の状況を規定する歴史的根源」の一つにほかならない。この問題は，これまで政府関係の経済分析はもとよりECLAの分析においても十分な検討がなされていなかったことを考えると，本書におけるこの問題の明示的な指摘の重要性が理解できる。

注目すべき第3の点は，本書において1950年以降が新たな一時期として，しかも1930年以降の「産業の未統合」のアルゼンチン経済の欠陥が顕在化した時期としてとらえられていることである。現在をこのようにとらえ，それまでの時期とは明確に区別することによって，この時期の停滞の原因をよりよく理解することを可能にするのである。

その停滞の原因は前項の最後に要約した2点にほかならないが，それぞれ先に述べておいた本書の二つの重要な視点に対応し，それらの視点から行なわれたそれまでの時期の分析との対比が，上記2点の停滞の要因としての重要性を，きわめて明確なものにしていると思われる。

本書の最後の短い章「統合された産業の経済(economía industrial integrada) の前提条件」に述べられているいくつかの政策提言も，それ自体として取り出すなら，特に目新しいものではないが，上記の分析との関連のなかで考慮するとき，それら――特に，輸出産品の多様化，土地制度の変革の必要など――が重要な意義を持っていることを理解しうるのである。

ここでの本書の紹介も，このような観点から要約したが，さらに著者は，先のような構造的な停滞によってひきおこされたインフレの問題を，いわゆる「構造学派」の見解に基づいて分析し，また，これに対して行なわれた諸政策に言及し，また各時代の地域格差の問題を各時代の経済構造と関連させながら論じている点も注目しておく必要があろう。

最後に，若干の不満を付け加えるならば，本書の分析においては，著書自身が発展段階を設定することによって可能となる三つの点の内の一つにあげている，各段階における社会諸勢力間の勢力関係の動態――より具体的には，古い勢力としての地主，それに対する借地農・農業労働者，また1930年以後の時期に重要になる産業資本家，都市労働者，中産階層，それに全時代を通じて外国資本の勢力など――が，各時代の経済構造とどのように関連するかが，ほとんど触れられていないことである。こうした点が明らかにされれば，これら勢力の関係を強調した研究，たとえば，レオポルド・ポルトノイ著『20世紀のアルゼンチン，II，アルゼンチン経済の批判分析』(Leopoldo Portnoy, *La Realidad Argentina en el Siglo XX, II, Análisis Crítico de la Economía*) との関連も理解しえたのではないだろうか。

つぎにこのことと関連して，農業中心の経済から国内市場向け工業の成立していく過程の分析が，必ずしも十分ではないと思われる点を指摘したい。一般に農民の都市労働者への転化と産業資本の成立の過程は，経済史のなかでも最も重要な部分の一つであると思われるが，特にアルゼンチンにおいては，農業は初めから比較的近代的な生産関係のもとで輸出向け生産を行なっていたこと，また新規の労働力が絶えず移民として流入していたことなどの特徴を持っており，現代の経済構造を理解するためにも詳細な検討が必要とされよう。

本書では，1930年以後の輸入代替工業の発展，産業構造の変容が強調されているが，農民の都市への移動，工業化は，この時期に一時に起こったことではなく，むしろ，それまでの「1次産品輸出経済」の時代にしだいに蓄積されてきたものであることは，1930年に農業人口の全就業人口に占める割合がすでに36%にすぎなくなっていたことからも明らかである。したがって「1次産品輸出経済」下――特に第1次大戦後から1930年に至る時期が重要である――において徐々に進行したダイナミックな工業の成立・拡大の過程――そこでは輸出向け農業生産に支えられた国内需要と，大土地所有制度のもとでの農業労働者の低賃金に規定された低賃金の都市労働者と失業者の存在などが重要な意味を持っている――に関する分析が必要だったのではないかと思われるのである。

（調査研究部ラテン・アメリカ調査室　細野昭雄）